

方言と民俗

——上田小県地域を中心に——

塩入 秀敏

はじめに

民俗学は民間伝承を通して生活変遷の跡を研究し、民族文化を明らかにしようとする学問である。ここでいう民間伝承とは、民俗学で言うところの常民の間に見られる知識および技術の伝承のことで、多くは文字や音声・映像で記録されることなく伝承されきたる。民俗学の研究対象は常民の生活のあらゆる場面に及ぶので、それこそ多岐にわたるが、一応10余の分野に区分されている。その分野の一つにもっぱら口から耳へと伝承されてきた口頭伝承があり、昔話・伝説・民謡・童謡・俗信・迷信・民間療法・禁忌・方言などに分類されている。方言は、民間伝承を形成している口頭伝承の一つであり、民俗学の研究対象である。

市町村誌などで方言についての調査結果は民俗編に収録されていることが一般的であるが、民俗学にはその概念は方言と重なる部分が多いものの方言とはいわない「民俗語彙」という学術用語がありながら、市町村誌では一般に理解されやすい方言ということばを使っているのである。言語学としての方言研究では、語彙そのものの研究とともに、音韻・アクセント・転訛など言語系列などに研究の主眼がおかれることが多いと思うが、民俗学ではむしろことばの伝播や分布、使用する社会の違いなど常民の生活に直結する部分の研究が中心となり、言語学の視点とはおのずから異なっている。しかし、市町村誌などでは、言語学・民俗学両者の視点や方法論を取り入れた成果が収録されているのが実際である。

本稿では、民俗学における方言について、とくに上田小県地域を中心にいくつかのことばを取り上げ、伝播や分布を検討し常民文化としての方言を考えてみたい。

1. 上田小県地域方言の伝播と分布

(1) 上田小県地域の地理的位置と方言

上田小県地域は長野県を4区分した東・北・中・南信の東信に属し、東信の中では北西部に位置し、中央部を貫流する千曲川流域に沿って発達した交通網により、北信および同じ東信の北佐久地域と密接な関係を有する。しかし、古い時代には和田峠、大門峠、青木峠、鳥居峠などを介して、南信、中信、群馬県吾妻郡との関係も大きかった。

その上田小県地域の方言は、一般的には東日本方言の長野県方言のうちの東信方言に属する。けれども、同じ東信方言でも北佐久地域、南佐久地域の方言とはかなり異なる部分があり、上田小県（上小）方言というべきものと考えられている。たとえば

マエ（前）mae → メー me:

ハイル（入る）hairu → ヘール he:ru

ワルイ（悪い）warui → ワリー wari:

のような連母音の融合は東信方言に顕著で、これは、佐久も上田小県も大きな差はない。しかし

オヒサマ（お陽さま）ohisama → おしさま osisama

のように「ヒ」と「シ」が混同することは、関東方言の影響でとくに南佐久地域に著しいが、上田小県地域ではほとんど認められない。蚕の上簇を「ヒキル」という地域と「シキル」という地域があるが、この境界線の一部は旧滋野村の中を通っている感があり、シキル地域が分村して小諸市に、ヒキル地域が東部町（現東御市）の一部となったがごとき状況である。

長野・山梨・静岡方言をナヤシ方言といい、語彙・文法などで互いに親縁性の強い方言とされているが、上田小県方言はそれ以上に越後、とくに中頸城地方の方言と共通する部分が結構認められる。それは、単に北国街道を通して人の行き来が多かったという要因だけではない。その点については後述したい。

(2) 上田小県地域への方言伝播

ある地域の文化は、その地域を取り巻く360度の地域との関わりあいの中から生まれでて形成されてきたものである。その関わりあいの濃淡によって伝播して定着する場合もあり、しない場合もあった。方言もまったく同様である。

いくつもの方言を取り上げてその分布を詳細にみると、その分布区域の先端が弧状をなす場合がある。その場合、周辺地帯との方言交流があり、弧の元の方角からの伝播の結果であることは明らかであるが、長野県方言の場合、「中部波紋」「北越波紋」「関東波紋」として具体的に多くの例を示したのは青木千代吉氏であった。

青木氏による「中部波紋」は、「中部地方に広く分布するものは勿論のこと、本州西部から中部にかけて広く分布するものをふくめている」が、氏が示す分布図をみると、中山道を経由して、あるいは天竜川沿いに遡上してきたと考えられるものが多いので、むしろ名古屋を中心にした（東海西部も含む）「中京波紋」という方が適切かと思われる。ここでは「中京波紋」としておきたい。

① 関東波紋

江戸を中心にした関東からの伝播によって定着した方言である。上田小県地域の場合、この波紋によるものが最も多いと考えられる。江戸時代、江戸では田舎っぺのことを「おしな」と言った。「おしな」の「しな」は「しなの」のことで、江戸に来る（いる）田舎っぺの代表が信濃人であつたらしい。江戸には、信濃人に限らず地方出身者はたくさんいたはずであるが、関東は江戸近郊として除くと信濃は地方でも江戸に近く、多くの信濃人が頻繁に往来していて、よく江戸っ子の目についたのでそう言うようになったのだろう。その結果、多くの江戸文化が移入されたが、言葉もその一つであり、とくに連母音の融合は代表的な例である。

青木氏は関東波紋の例として「ものもらいの方言」「場所、方向を表す「セ」」を上げて明快に説いている。ここでは「ハソン」を上げてみたい。「宝暦二年申年六月より名古屋御城の破損始まる」

（「水いはい」『名古屋市史』）

普通に読むと名古屋城の破損がこの年から始まったということなるが、実

はそうではなく修理が始められたということなのである。破損は壊れることで、修理はその反対に直すことであるはずなのに、修理することをなぜ破損と言ったのだろう。これにはある業界でわざわざ反対語を使った隠語であるとする説をはじめいくつかの説明がなされているようである。

「どー、かしてみろ。ハソンしてくれるわ」

実際に筆者が祖母から言われた言葉である。これ以上壊されたらたまらないと思ったが、修理してくれることであった。祖母は生きていれば110歳くらいである。母は84歳だが、この言葉を知ってはいるけれど使ったことはないと言う。その子どもの世代になると、聞いたことがある者がわずかにいるだけになってしまう。生存率の低い言葉である。

「ハソン」の分布をみると、東北地方南部の山形・福島県、関東地方一円、新潟・福井・長野・静岡・岐阜・愛知・三重県の中中部地方、近畿地方では奈良県に認めることができる。江戸を中心に広がった言葉であることは明らかで、その広がりも東北地方南部と近畿地方の一部にしか達していないところをみると、発生もあまり古くないことを物語っている。

②北越波紋

「親愛語「タイ」」と「尊敬語「ハル・ナハル」の変化形」を青木氏は上げる。ここでは「ビーロンジ」を考えてみたい。

「ビーロンジ」は川にいる巻貝で蛭の幼虫の餌になるカワニナ（川蝻）のことである。個人的にはとても好きな言葉であるが、各地で盛んな蛭水路づくりでもカワニナを必要とは言ってもビーロンジという人はまったくいない。共通語に席卷されてしまった姿を見ることができる。

「ビーロンジ」は、薬用や染料に広く使われる檳榔樹（びんろーじゅ）という椰子の木の実（ピンロージ、檳榔子）が語源で、川蝻の細長くらせん状に巻いている形状がこの椰子の実の形に類似していることから言われ始め、石川・富山・新潟・長野県に分布している。植物の根で「ちよろぎ」というらせん状のものを言う場合、田螺の小さいものや細長いらせん状の殻をもつ貝を言う場合を含めても以下に示すようなきわめて限定された分布域しかもたない特異な言葉である。

石川県	ピンロジ
富山県	ピンノジ

新潟県下越	ビンノジ・ビロジ（田螺の小さいもの、田または溝にすむらせんがあり一方が細くとがっている貝をも言う）
長野県下高井	ビンドロ・ビノジョ
上田小県	ビーロンジ・ビロンジ
佐久	ビーロンジ・ヒーロンジ
安曇・東筑摩	ビンドジ・ベンロジ・ギンドージ・ゲンローシ・ゲンドージ（安曇ではちょうろぎのことをも言う）
山形県	ビンノス（ちょうろぎ）

これを見ると、京都（おそらく）で誕生したビンロージが北陸地方へ伝播を始め、石川・富山・新潟・山形県へと伝わった経路は明らかであり、長野県へは新潟県から分かれて伝わったと考えられる。そもそも初めの形であるビン・ロー・ジのうちのビンは山形県まで忠実に伝わり、ロー以下が転化している。長野県でも県内に入り始めた地域ではビン（ベン・ギン・ゲン）だが、東信に至るとビンがビー（ヒー・ビ）に、ローがロンに転化するのである。その原因がどこにあるのかは分からない。憶測ではあるが、東信人はビンロージよりビーロンジの方が発音しやすかったことも考えられる。

ともかく、北越波紋の例の一つとして上げたい言葉である。

③中京波紋

東信地方への中京波紋の例としては、文化の中心地であった近畿地方を中心に「ヒンガラ目」が生まれ、中部地方にまで広く使われるようになった「ヒンガラ跳ビ」（片足跳び）→「ヒンガラ」→（ヒとシの混同）→「シンガラ・シンカラ」が上げられるが、そのほかにはあまり好例は見当たらない。下伊那地方は中京波紋の例がきわめて多く、「イル（居る）」を「オル」と言う、「イコウ（行こう）」を「イコマイ」（中京）→「イカマイ」（下伊那）と言うのなどは代表的な例で、河童を「カーランベ」と言うのも例の一つである。

明々後日を「シアサッテ」というのは関東波紋で、「ヤノアサッテ」というのは中京波紋であり、その境界線が長野県内を通っている。詳細は省略するが、明々後日の約束を方言ではできない近接した地区がいくつもあ

る。

④四方からの波紋

長野県内には「まぶしい」を言う方言が4種類ある。北信は新潟県中頸城地方と同じ「カガッポイ・カゲッポイ」、東信は関東地方と同じ「マジッポイ」、中信のほとんどと南信は山梨・静岡県と共通の「ヒドロッコイ・ヒドロツタイ・ヒズルッポイ」、中信の一部は「ママコイ」で岐阜県の飛騨地方と共通している。これは長野県の東西南北からの影響を受けた結果であり、まさに四方からの波紋であるといえる。ただし、この分布域も徐々に変化していて、北信（北越波紋）の影響の強い上田小県地域・北佐久地域は「マジッポイ」を使わなくなり、「カガッポイ・カガッポシー」に変わった。そして今や、県下全域が共通語である「マブシイ」に覆いつくされてしまった。

2. 上田小県地域における民俗と方言

(1) ユイ

「ユイ」は「結」であり、農作業などの労働の対価を現金で支払わず、同等の労働で決済することである。しかし、上田小県地域では共通語で「ユイ」と言ってもあまり通用しない。普通に使われるのは「エエッコ」である。

「今日の分はエエッコにしゃしょ」

というように使い、共通語で言えば「今日の私の労賃は、今度あなたに私の家の仕事を手伝ってもらうことで相殺にしましょう」となる。方言はきわめて合理的な短さで表現できるところに特徴がある。地域に住む常民にとってはこれで十分に意味が通じるのである。場合によっては「今日の分は」を削除しても意味が通じてしまう。常民の間には共有する微妙なニュアンスが存在し、多くを言わなくても済むようになっている。

(2) オハヨウゴワシタ

朝のあいさつ「オハヨウゴザイマス」のことを上田小県地域では過去形で「オハヨウゴワシタ」と言う。お祝いも「オメデトウゴワシタ」、お悔やみも「トンダコトデゴワシタ」とすべて過去形である。最近では「ゴワシタ」

を使わずに「オメデトウゴザイマシタ」と言うが、それでも過去形であることに変わりはない。

これについては議論がある。すでに過去になったことは過去形で言い、現在進行中のことは現在形で言うべきだ、という具合に様ざまな意見が出されている。しかし、婚儀に際して、挙式はすでに終わっているが、祝辞を述べる披露宴は今その最中である、このような場合はどうするのか、などと不毛と思われる議論もなされているのである。これは、ある地域の民俗習慣から来ていることであり、ここまでは過去形、このような場合からは現在形でというように厳密に区分すべきものではない。いや、そうすることによって民俗語彙としての方言の大切な価値を滅失させてしまう恐れさえある。

「オハヨウゴワス」「オメデトウゴワス」を使うこともあるので、地域において過去形と現在形の違いをどのように認識しているかを究明するほうがよほど建設的な議論ではないだろうか。

(3) オモシロクデモネー

「全然面白くない」「さっぱり面白くない」ことである。「オモシロクナイ」の連母音が融合すると「オモシロクネー」だが、間に「デモ」が入った形で、意味を強めている。ほかにも「イタクデモネー」「オカシクデモネー」など例はいくらでも上げられよう。しかし、「オモシロク」も「デモ」も「ネー」もすべて共通語である。それが複合して「オモシロクデモネー」になると共通語にない言葉になる。すなわち方言になったのである。

この言葉は、問いかけに対する返事である。つまり、「オモシレーカ？」に対して「オモシロクデモネー」と応えるのであるが、ニュアンスとしては負け惜しみの要素がいく分含まれている。これも、ある地域独特の言い方であり、常民の気質にも関係しているように思えてならない。長野県民は屈屈っぽいと言われることと通底しているのではないだろうか。

(4) ダイロ

米や麦・豆の脱穀をする機械である脱穀機の部品の一つに「ダイロ」がある。もちろん金属製で、らせん状の部品が回転することによって脱穀の際に出る小さな石粒やゴミなどを機械外に押し出す役目を持っている。

千歯こきや足踏み脱穀機に比べると発動機の力で動く脱穀機は近代的な

機械であった。その近代的な機械の部品であるからには「ダイロ」は外来語であるに違いないと思いついて、しかし、あるとき「ダイロ」は「カタツマリ」の方言であることに気がついて、そうしてみると、脱穀機の「ダイロ」はカタツマリの殻の外殻がなくなって芯だけになった形をしている。ということは、部品の「ダイロ」は全国的な言い方ではなく、カタツマリのことを「ダイロ」という地域だけの言葉であり、あるいは、その中でももっと限定された地域でしか使われないものであるかもしれないのである。

脱穀機の部品としては「不要物排出装置」というような正式名称があるかもしれないが、それを一言「ダイロ」と言ってしまう常民の知恵には感服するばかりである。

現今では各地にコイン精米機が設置されている。この機械にもモミや玄米を機械の中に押し込んでいくらせん状の羽がついた棒があるが、それを「ダイロ」とは言わない。かつて「ダイロ」と呼んだ往時の常民の感性の方が現代人のそれよりもずっと豊かであった。

(5) オヤキ

「オヤキ」は長野県の食の文化財の一つである。食の文化財に選定されてから売上高はうなぎ昇りで、今や130億円にも達しようとする勢いだという。

この「オヤキ」だが、オヤキと発音し、アクセントは中間の「ヤ」におかれている。このアクセントは、「オヤキ」文化の中心地とされる長野市の西山地区から上水内郡の南部一帯にかけてのアクセントで、現在では、全県下で製造・販売されている「オヤキ」のすべてが同じアクセントで統一されている。この「オヤキ」は囲炉裏の熱い灰の中で焼いたり、フライパンで焼くもので、文字通り「お焼き」であり「焼き餅」と言うところもある。

ところが、小麦粉に重曹を混ぜ蒸籠で蒸して饅頭のようにふっくらとしたものに作ったものを「オヤキ」と言う地域がある。上田小県地域をはじめ東信地方一帯はこの饅頭のような「オヤキ」が主流だった。アクセントは平坦で、北信風の真ん中にアクセントをもつ焼いた「オヤキ」とは別のものであったが、今では北信風「オヤキ」にすっかりその座を奪われて、

絶滅に近い有様となってしまった。

しかし、民俗文化である饅頭風「オヤキ」の存在は重要で、その分布を詳細に調査することにより、同じ粉食文化の中でも微妙な相違を発見することができ、食文化そのものとその背景となる生産や生活圏の問題に迫ることが可能となるものである。

(6) カルサン

主に婦人がはくもんぺ・はかまのことであり、「軽衫」という漢字が当てられている。上部は緩やかでゆったりとしていて、下部はすぼめられ労働用あるいは防寒用に用いられた。TVドラマで水戸黄門さまがはいているもんぺと考えればよい。「山ばかま」とも言う。また、男性の膝までのももひきを言う地方もある。関東・中部地方には普通に分布し、京都府・和歌山・香川・徳島県を西限としている。北は仙台だけ飛び地状に分布している。

もとはポルトガル語「カルソン」で、15世紀中ごろにポルトガル人宣教師の渡来によってもたらされたものが民間に定着していったものである。「南蛮図屏風」に描かれている南蛮人の着用しているズボンが裾がすぼまった形のカルソンであるが、日本のはかまのように前と後ろに別々の紐がついていて、それを前後で結ぶ形ではないのではないかと思われる。渡来の服飾文化を採用しても、日本人の上着である着物に合うように改良して日本風「カルサン」を作り上げてきた。

西日本に分布が見られないのは、防寒用の機能があまり必要でなかったからではないだろうか。反対に積雪地帯では左右の分かれ目をずっと下にもってきて、着物の裾が雪に濡れるのを防ぐためのものに発展した。「雪ばかま」である。方言の単なる分布・伝播ではなく、ある地域の衣生活の中から生まれ出てくるものに派生することがよくわかる言葉であるといえよう。

最近、婦人服の宣伝チラシに「カルソンパンツ」があって驚いた。「カルソン」が「カルサン」になって終わりかと思っていたら、現今でも「カルソン」が生きて使われていたのである。

おわりに

方言は誕生し伝播して定着し分布圏を形成する。ある時期の政治経済文化の中心地から東西にまた南北に伝播していき、古い言葉ほど外側にあるという「方言周圏論」は原理原則を知るときには偉大な理論である。また、人文地理的な条件から絵に描いたような周圏的分布にはならないという「方言区画論」も大切な理論である。しかし、そこにさらに地域に暮らす常民の生活、すなわち、商圈、通婚圏、通勤圏、通学圏などの普段の生活圏、あるいはムラの生活、衣食住をはじめとする常民文化のあらゆること、つまりその地域の民俗全般を知ることによって、常民の紐帯となっている方言の研究はより実態に即したものになる。まさに、方言は「地理的要因のほか、社会的、文化的諸条件がかかわり、複合し、広い意味の生活環境的条件の上に成り立つ」（馬瀬良雄）ものといえる。普通の人、一般の人の生活の中に息づいている生活文化財である方言は、生きている文化財として常民文化、すなわち民俗の中で研究してこそ血の通ったものになるのである。

参考文献

- 『日本方言大辞典』小学館
『標準語引 日本方言辞典』小学館
長野県立上田中学校編『信州上田附近方言集』国書刊行会
馬瀬良雄『信州のことば 21世紀への文化遺産』信濃毎日新聞社
青木千代吉「長野県方言の特質」（『学海』第三号）上田女子短期大学国語国文学会
市川健夫『信州学大全』信濃毎日新聞社
上原邦一『東信濃方言集』国書刊行会
長野県の県・郡・市町村史誌の方言編・民俗編